



『日本化学総覧』第1集 第1巻

日本化学研究会, 1927 (昭和 2)

今、どんな研究が行われているのか？それを知るためには、すべての雑誌に目を通す代わりに、どの雑誌にどんな情報が載っているか、という文献情報（二次情報ともいいます）が欠かせません。欧米では 1830 年に”Chemisches Zentralblatt”、1907 年に”Chemical Abstracts”といった化学関係抄録誌が創刊して、文献情報が整備され、研究の基盤となっていました。しかし日本語の論文はこれらに収録されないため、この時代に日本の文献を探すのは、欧米の文献を探すよりもずっと困難なことでした。

そのような環境に不便を感じていた本学化学教室の初代教授・真島利行氏は、自らが中心となり、1927 年（昭和 2 年）、本邦初の化学関係抄録誌「日本化学総覧」を刊行します。その編集作業は化学教室の一室や倉庫で行われながらも、日本の化学関係情報の流通を支えました。

「日本化学総覧」は発刊当初から「第1集」と「第2集」に分かれており、「第1集」は過去の化学文献をさかのぼって抄録するもので、約 10 年をかけて明治大正期の文献を網羅して完結、「第2集」は雑誌に次々と発表される新たな化学関係論文を抄録する定期刊行物でした。

教室の一角を編集室にして開始された本書の刊行は、日本の化学研究の礎を築き、その進歩を牽引する役割を果たした歴史的事業として評価されています。

参考文献：「東北大学百年史 5 部局史」





■真島利行 まじま・としゆき（1874—1962）

日本の明治・大正・昭和期の有機化学者。年寄に通じるトシユキという音を嫌って欧米論文では Riko（リコウ）と署名した。東京帝大で有機化学を専攻し、1903 年同大学助教授となる。1907～1911 年にかけてヨーロッパに留学し、ドイツ、スイスの大学、イギリスの研究所などで有機化学を研究し、帰国後、東北帝大教授に任ぜられた。1933 年に大阪帝大へ移り、1943～1946 年同大学の総長を務めた。1905 年ごろよりウルシの研究に着手、主成分ウルシオール（ウルシ酸）の構造の解明に成功した。また、植物色素、合成染料、アルカロイドの研究などを行い、これを通して多くの有機化学者を育てた。1927 年「日本化学総覧」を創刊。1949 年文化勲章を受章した。[参考：森北出版・デジタル化学辞典(第 2 版)]

（写真：東北大学史料館写真 DB より）

■日本化学総覧のあゆみ

- ・1921 年、全化学関係の抄録誌を、研究室在籍の学生たちの分担によって作成する方法を構想し、財団法人啓明会の援助を受けて編集資金を調達する。
- ・1923 年、明治大正期の文献をまとめた原稿ができ、東京で出版社を探していたが、関東大震災（9 月 1 日）発生のため出版どころではなくなる。
- ・1925 年、再び東京で出版社を探したものの、震災の被害が癒えない中での売れ行きが不安視され、応じる出版社が見つからず。事実上出版が不可能になり、啓明会からの資金援助の際、作成した抄録は必ず出版する誓約をしていた真島教授は苦境に立たされる。
- ・1927 年、一計を案じて篤志家に寄付を呼び掛け、出版資金を集めた真島教授は、この資金により日本化学研究会を設立し、ついに日本化学総覧の自己出版にこぎつける。
- ・印刷はしばらくの間東京で行っていたが、1932 年から仙台の笹氣印刷所で行うこととし、経済面だけでなく編集・校正の面でも多大な便宜を受ける。
- ・1944 年頃から戦争により用紙の配給が悪化し、発行が次第に遅延する。
- ・1945 年 7 月 10 日の空襲により、日本化学研究会は書庫を焼失し、種々の記録類を失う。笹氣印刷も全焼。終戦後は発行を 1 年間停止する。
- ・戦後すぐは購読者が激減、その後も化学分野のいち早い国際化により、研究者が外国の抄録誌に頼る傾向が強まったため、購読数が回復せず財政が窮迫する。
- ・1958 年、日本科学技術情報センター（JICST）に業務を移譲する。
- ・1975 年、誌名が『科学技術文献速報 化学・化学工業編（国内編）』に変更となる。『日本化学総覧』の名称が消えたが、巻数は継続された。